

フライングギースを探せ

～田んぼを餌場とする雁の分布調査～

ふゆみずたんぼ農家
齋藤 肇

背景：ラムサール条約湿地「蕪栗沼・周辺水田」や「化女沼」には毎年冬期間大型の水鳥である、マガンやヒシクイといったガン類が多数飛来し、「ねぐら」として利用している。近年マガンの羽数が急増し、多い時には蕪栗沼で約13万羽、化女沼で約2万羽ほどが「ねぐら」として利用している。

目的：蕪栗沼や化女沼をねぐらとするマガンやヒシクイを中心に、日中の多くの時間を過ごす田んぼでの分布や利用状況について調査し、習性や行動を知る。

方法：①「ねぐら」からの早朝の飛び立ちをカウントし、マガンの羽数を把握
②田んぼを大きな道路や河川など分かりやすい境界を基準に区域毎に分ける。(5班集体制ほど)
③田んぼなどに降りているガン類の羽数をカウントし、調査用紙に記入
④ガン類の利用していた場所(田、畦・農道、その他(大豆、麦、牧草))を記入
⑤ガン類の行動を記入(採食、休息、背眠、警戒)
⑥積雪状況や妨害要因、首輪標識番号など備考を記入
⑦各区域出来るだけカウントが重複しないように午前中内で調査を終了
⑧まとめ

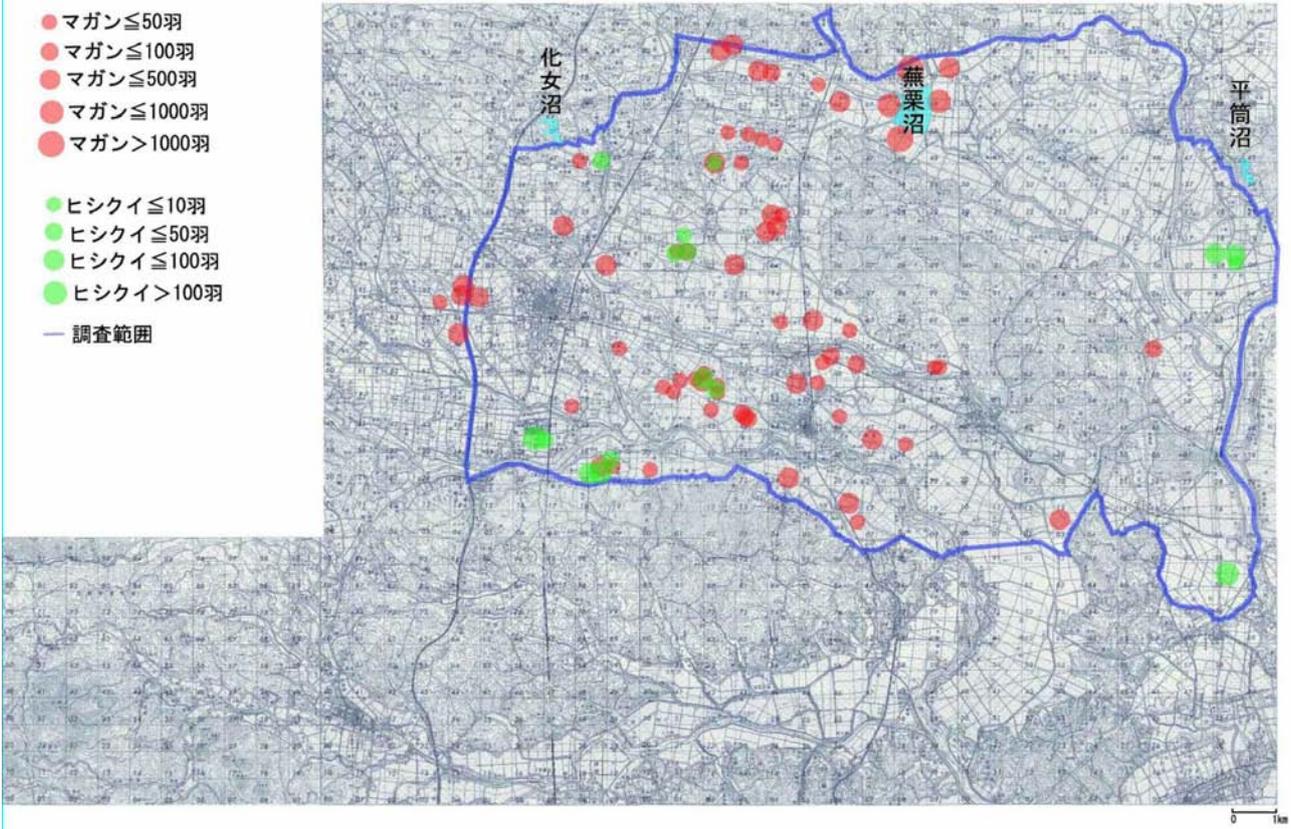
結果・考察：①マガンの飛び立ち後の補足率は20～40%ほど、ヒシクイは60～80%ほどを確認することができた
②マガンは飛来当初、大きな群れで周辺水田や蕪栗沼より西側の水田を頻繁に利用する傾向がある
③マガンの田んぼの利用は月が進むごとに西側から東側に移行する傾向がある。
④マガンは飛来当初、近場の田んぼを利用し、月が進むと遠くの田んぼを利用するようになる
⑤蕪栗沼と化女沼の間の田尻地域周辺は各月で利用頻度が高いが、餌量のためか、同じ田んぼの利用は少ない
⑥マガンは飛来当初田んぼ利用率が高く、その後収穫後の転作大豆畑、その後、畦、農道、麦、牧草に飛来している傾向がある
⑦2008年度、2009年度は以前より、マガンの羽数増加が早く、マガンの利用場所の移行が早い傾向がみられた
⑧ヒシクイの利用する田んぼはマガンよりも特定の地域に集中する傾向がある
⑨ヒシクイはマガンより警戒心が強く、広々とした田んぼより、丘陵地帯の辺縁な

どに小集団で見られることが多い

ガン類田んぼ利用状況調査図

- マガン ≤ 50羽
- マガン ≤ 100羽
- マガン ≤ 500羽
- マガン ≤ 1000羽
- マガン > 1000羽

- ヒシクイ ≤ 10羽
- ヒシクイ ≤ 50羽
- ヒシクイ ≤ 100羽
- ヒシクイ > 100羽

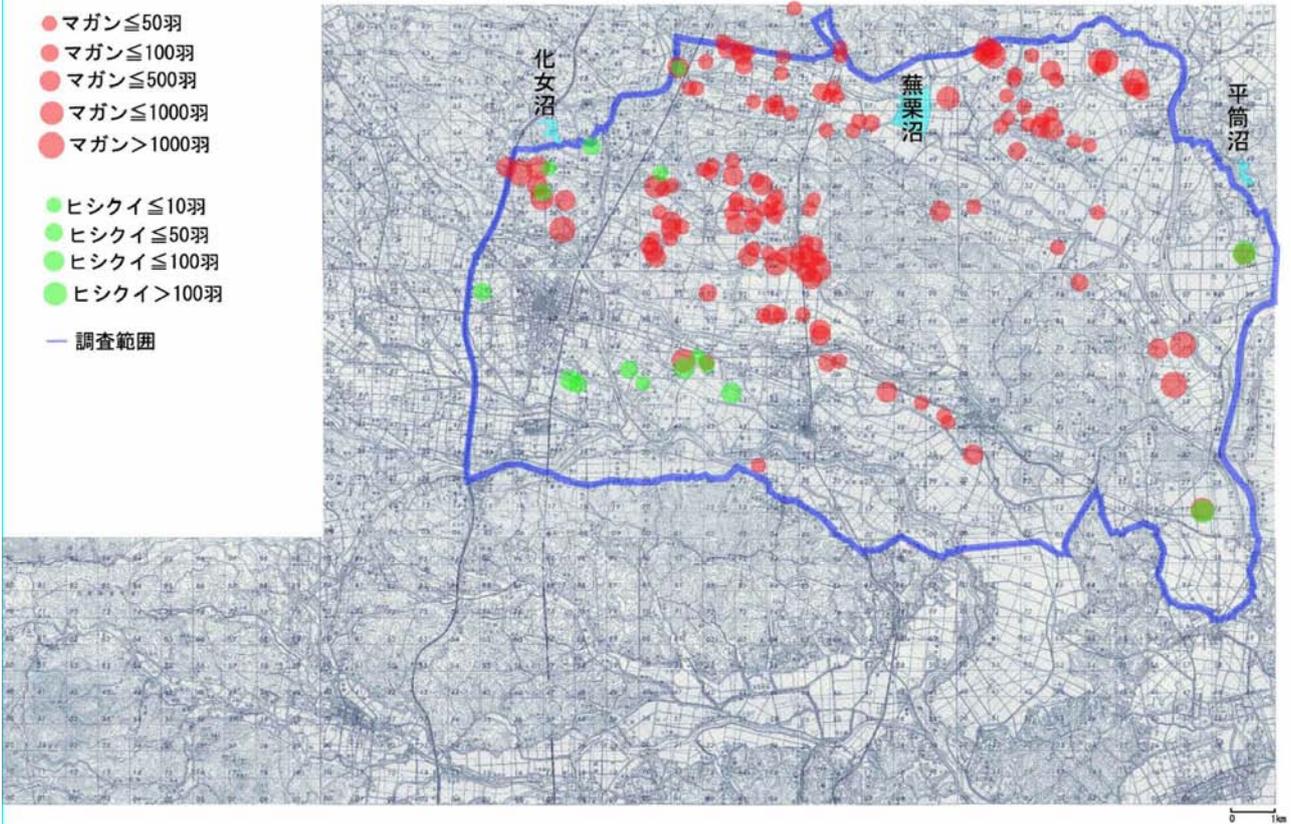
— 調査範囲


調査年月日 2007年11月25日(日) 9:00~12:30

ガン類田んぼ利用状況調査図

- マガン ≤ 50羽
- マガン ≤ 100羽
- マガン ≤ 500羽
- マガン ≤ 1000羽
- マガン > 1000羽

- ヒシクイ ≤ 10羽
- ヒシクイ ≤ 50羽
- ヒシクイ ≤ 100羽
- ヒシクイ > 100羽

— 調査範囲


調査年月日 2008年2月17日(日) 8:40~13:20